Cruises Historia

クルーズご意見番〝初代クルーズマスター 松浦睦夫〟が語る

ゆたか倶楽部 よもやま話

vol. 6

1991年（平成3年）、初代「飛鳥」が就航しました。12月24日横浜港発の処女航海は満船で華々しいデビューを飾りましたが、その後の販売状況は芳しくなく、翌年のベトナムクルーズの乗客は少人数だったと聞いています。定員は600名ですが、日本船の船会社主催のクルーズは今でも最少催行人員は2名に設定されており、催行中止はあり得ません。極端なことを言えば、2名1組で貸切りになってしまうクルーズもあるかもしれません。当時ニュースキャスターだった櫻井よし子氏の日本テレビ平日夜11時からのニュースで飛鳥の宣伝広告を2年ほど放映していましたが、それでも苦戦していたようです。

郵船クルーズ二代目社長の津山正氏が、登録旅行業第1種の大手15社限定だった販売窓口を、小さくてもクルーズを扱っている登録旅行業第2種の会社にも販売網を広げることを決定し、当時第2種だったゆたか倶楽部にも声がかかりました。（弊社は平成7年1月に運輸大臣の第1種の登録を受けました）

「コーラル・プリンセス」でお世話になっていたスワイヤーの新村氏が、郵船スワイヤー（スワイヤーと日本郵船が折半した会社）から郵船クルーズに転籍しており、「あそこは小さいけれどクルーズ専門で集客力がある」と弊社を推薦してくれ、1992年（平成4年）3月に郵船クルーズ本社に呼ばれました。現在は横浜ランドマークタワーに本社がありますが、当時は東京丸の内の親会社の日本郵船本社ビルの中にありました。「御社にも販売していただくことに決まりました」と渡された販売規約の冊子の厚みが今でも忘れられません。

最初の飛鳥の募集はハワイクルーズです。当時、ハワイは他の船会社は実施しておらず、飛鳥がパイオニアでした。ゆたか倶楽部で15名様の集客があり、往復のフルクルーズ参加は全体で30名様中8名様がゆたか倶楽部のお客様でした。お陰様で、販売窓口になった旅行会社の中でも取扱いを始めて最初に3番目の売り上げを達成し、推薦してくれた新村氏の顔を立てることもできました。12月には飛鳥をチャーターし、ワンナイトクルーズを実施した際には、郷里の長野から小学校の恩師柳澤夫妻を招待し、忘れられない思い出となりました。

1994年（平成6年）、飛鳥が第一回オセアニアグランドクルーズを実施することになりました。フルクルーズは横浜発着45日間ですが、郵船クルーズの募集パンフレットは6ポーションに分かれた区間クルーズしかありません。フルクルーズで申し込むお客様はいないであろうと思っていたのでしょう。しかし、ゆたか倶楽部のお客様数名から、フルクルーズで乗船したいとリクエストがあり、船会社と相談してFステートルーム2名利用で一人160万円に設定して販売することになりました。結果、全体でフルクルーズ参加者は19名様、ゆたか倶楽部から一番多く、9名様がフルクルーズを楽しまれました。

クルーズ終了後、郵船クルーズ営業部長の猪瀬氏が来社された際に、来年もコースを変えてオセアニアグランドクルーズを実施するにあたり「何か集客のアイディアはありませんか。」と求められ、私は「フルクルーズの日数を少し短くして、早期割引で100万円で販売してみたら」と言ってみました。それが理由ではないと思いますが、100万円クルーズが現実のものになり、募集スタート10日間で満船になりました。ゆたか倶楽部からも65名様に参加いただきました。その後すぐに発売した第一回世界一周クルーズは即日完売し、ゆたか倶楽部からは53名様が参加しました。今だから言えますが、この頃から大手旅行会社による度々の中傷や妨害が繰り返し行われましたが、「今にみていろ」とじっと我慢をし、自社ビル建設の用地探しを始めました。

熊野大花火大会、ねぶた祭の花火、伊東花火など花火観覧を組み込んだクルーズも飛鳥が一番最初です。飛鳥の登場で日本船は4社6隻（飛鳥、にっぽん丸、ふじ丸、新さくら、おりえんとびいなす、おせあにっくぐれいす）になり、クルーズの申し込みも増え、弊社の経営も安定してきました。この頃、トラベルジャーナルの沢木泰昭さんからクルーズの勉強会の誘いを受けて、読売旅行の伊藤氏、PTSの祖師氏、JTBの大林氏と私の5人で2ヶ月に一回、麹町のトラベルジャーナルの会議室を借りて今後のクルーズのあり方、船社への要望などを話し合いました。昨今のクルーズ事業の一助になったかどうかは定かではありませんが、当時若い闘志を燃やしていた私達も30年の時を経て各々会社も引退してしまいました。今では満74歳になった私だけがクルーズ旅行会社に直接従事しています。